

【別紙 2】

審査の結果の要旨

氏名 勝又 裕斗

本論文は、中選挙区制における選挙競争について、有権者の戦略投票と候補者の選挙戦略に関するモデル分析を行い、モデルから導き出された仮説にもとづいて、シミュレーションの方法による分析および選挙結果データと世論調査データによる実証分析を行う研究である。本論文は、中選挙区制が小選挙区制とは異なる独特の戦略投票のインセンティブを有権者に与え、政治家による選挙戦略もそれに対応した特徴的なものとなることを主張し、理論的・実証的に分析する試みである。

本論文は、11章から構成される。

第1章序論に続く第2章では理論の全体が説明される。選挙競争のゲーム理論的モデルにおいては、小選挙区制では下位の候補を見捨てて上位2名のうち相対的に好ましい候補に投票する戦略投票が行われるが、定数 M の中選挙区制においては上位当選や落選する候補よりも最下位の M 位で当選を争う2候補のうち相対的に好ましい候補に投票する戦略投票が行われるために、実質的に $M+1$ 人の間で争われ、当選者の得票が均等化することが均衡解として知られている。本論文は、この均衡においては、さらに次点候補の得票も均等化する $M+1$ 均衡が成立するモデルを提示する。このモデルは、中選挙区制がきわめて激しい選挙競争になることを説明する。これに対応する候補者の戦略は、支持を拡大する際に既存の支持者の一部が戦略的な判断から他の候補者の支持へと離反してしまうことを防ぐために、これらの有権者に便益を供給し続ける「忠実な支持者戦略」であり、それによって激しい競争に勝ち抜くことができることを主張する。

第3章では、 $M+1$ 均衡のゲーム理論的証明が提示され、第4章では、シミュレーションの方法によって $M+1$ 均衡が単純な原理によって到達可能であり、有権者の行動のぶれに対して安定的であることが示される。

第5章および第6章では、 $M+1$ 均衡について実証分析が行われる。中選挙区制における選挙競争が非常に激しいことは、小選挙区制と比べて中選挙区制における最下位当選者に対する次点候補者の得票率の比率がより1に近くなるという仮説で検証できる。第5章では人口にもとづいて定数が配分される参院選挙区の1人区と2人区について、定数が2の中選挙区であるかどうかを処置変数とし、上記の得票比を結果変数として、厳密に因果関係を推論する回帰不連続分析手法によって仮説が検証される。第6章では1958-1993年の中選挙区制と1996-2009年の小選挙区選挙データを用いた切断時系列分析によって仮説が検証される。

第7章では、中選挙区制における有権者の戦略投票が、1983年総選挙のデータによ

って分析される。具体的には、総選挙直前に行われた世論調査データにおける投票意向を誠実投票と見なし、実際の選挙結果を戦略投票と見なして、戦略投票の結果、上位当選する候補および下位で落選する候補の得票率が減少し、 $M+1$ 位の候補の得票率が増加する仮説が検証される。

第8章では、中選挙区制における候補者の忠実な支持者戦略が、地方議員の選挙動員によって行われることに注目して、地方議会の議員定数の増加を処置変数とし、自民党の得票率を結果変数とする回帰不連続分析手法によって実証される。

第9章では、中選挙区制における戦略投票による $M+1$ 均衡によって現職候補者が選挙において有利になる「現職効果」がどのように現れるかが分析される。先行研究においては政党内競争がある自民党候補には現職効果が見られないとされていることに対して、本章では、政府資源にアクセスできる自民党議員だけが忠実な支持者戦略を取ることによって現職効果を得ることができるという仮説が提示される。分析では先行研究の結果が確認されるとともに、野党候補については現職効果がないが自民党のすべての候補についての分析では現職効果があることが明らかにされ、上記の仮説が支持される。

第10章では、中選挙区制が自民党および社会党の得票率と議席数に与えた影響が分析される。本章では、中選挙区制における戦略投票によって各政党が得る得票率のボーナス、それがもたらす議席率のボーナス、そして、戦略投票と各党の候補擁立と票割り戦略の成否の結果として得られたネットの議席率が分析される。自民党は有権者の戦略投票により得票率のボーナスを得たものの戦略上の失敗により議席を失いネットではマイナスの議席率となっていたことが示される。

第11章結論では、本論文の分析結果を要約した上で、今後の課題として個人レベルの分析を進めるための世論調査や実験室実験による分析の可能性が示されている。

本論文の評価は以下の通りである。

本論文の長所としては、第1に、研究されつくした感のある中選挙区制の計量研究にまださらに新たな研究を付け加える余地があることを示したことである。博士課程進学後2年半の期間で、中選挙区制における選挙競争をゲーム理論モデルとシミュレーションによって分析し、さらにマルチメソッドを駆使して実証的分析を展開しており、研究者としてきわめて高い能力があることが示されている。

第2に、従来の通説的位置を占めていた定数 M の中選挙区制においては M 人の当選候補が同数の票を獲得し、次点以外の落選候補はほとんど得票を期待できないという戦略的均衡を証明したコックス・モデルをリファインし、次点候補も当選候補とほぼ同数の票を獲得するというオリジナルな命題の証明を試みることによって、従来の理論を超えて選挙計量研究への新たなインプリケーションを得ようとした点が高く評価される。

第3に、厳密な因果関係の推論を行うための最先端の分析手法である自然実験が近年急速に発展して社会科学の研究に取り入れられているが、本論文は、いち早くそうした

手法である回帰不連続デザインや切断時系列分析の手法を、理論モデルから導かれた仮説を検証するために応用し、選挙結果の既存のデータおよび新たなデータ収集を精力的に行って巧みに実証分析を行っていることである。政治学における最新の研究として注目されるものと考えられる。

ただし、本論文にも短所がないわけではない。

第1に、本論文の全体構想は、オリジナルな貢献をめざすものであるが、モデル自体は通説の若干の修正にとどまっている。また、最先端の分析手法による研究は従来の研究とは一線を画すのびやかで大きな問題の捉え方として好印象を与えている一方で、伝統的な先行研究に対する言及や位置づけについて、おおむね適切な記述がなされているものの、必ずしも精査が徹底していない部分があり、改善すべき余地がある。

第2に、本論文の細部について若干の疑問がないわけではない。ゲーム理論モデルをシミュレーションで再現するには限界があるためにやや説得力が弱い所が見受けられ、計量データを分析のための変数として操作化する際に、必ずしも一般的とはいえないやり方をとっている部分があり、より説得的な分析を行うためにもう一工夫することによってさらに完成度を高めることができると思われる。

しかし、これらは、今後筆者がさまざまな現代政治研究のテーマへと研究対象を広げ、精力的に最新の研究手法を活用し、オリジナルなアイデアによるすぐれた研究成果を上げていく過程で自ずと解決されていく課題ともいえるものであり、本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上から、本論文は、その筆者が自立した研究者としての高度な研究能力を有することを示すものであることはもとより、学界の発展に大きく貢献する特に優秀な論文であり、本論文は博士（法学）の学位を授与するにふさわしいと判定する。